

# 点をつないで見えてくる：なぜ体制はドナルド・トランプを憎むのか？

【訳者注】論者は、今回の大統領候補の中で、無作法な道化師とも見えるトランプが、最も深くアメリカの病巣に迫って、そこから解決を図ろうとする人物だと見ている。かりに彼が落選したとしても（また当選の上、力及ばなかったとしても）、誰もが怖がって近づこうとしなかった根本的問題を、白日の下にさらして、大衆の注意を引きつけた功績は消えないだろう。これを読む限り、トランプがやろうとしていることは、アメリカという大国の命にかかわる大手術である。ウィルコックの言うように、アメリカはかなりの生命の危機を乗り越えなければ、生き残れないのはよく理解できる。泳ぎ続けるマグロのように、戦争をし続けていないと死んでしまうような国は、いつかは死ぬであろう。

By Prof. John McCurtry  
Global Research, April 5, 2016



表面的に見ると、トランプは屈強なレーガンのようだ。彼の押し出しのよさ、土着的なアメリカ至上主義、それに現実を示して見せる自信、そういったものが、大統領府からウソを追い出して見せるには、もってこいの人物であるように思わせる。

彼は、アメリカの誇りが第三世界並みに衰退し、多極世界になっていくのを、等身大上の姿に若返らせるためにやってきた、アメリカそのもののようだ。

トランプの物語は、アメリカン・ドリームが再び蘇らせることであるが、有力メディアと政治的エリートは、彼を、潜在的ファシストで災害をもたらす偽者だとして、容赦なく弾劾している。

しかし、もっと深い何かが動き出している。ある封じられてきた歴史的怨恨が、長いこと政治的舞台では口にできなかった深い底から沸き出している。トランプはそれを掘り起こし、

彼の立候補の理由に欠けているといつも言われていた、具体的な解決策を打ち出した。ペータゴン（米国防総省）の予算を半分にし、議会を、企業からの寄付による手当から切り離すという彼の提案が実現すれば、大企業のロビー活動が、トランプ大統領のおかげで失う国家からの収入は、莫大なものになるだろう。しかし彼を攻撃する者たちが、こうした爆弾的問題をあえて認めようとしらないのは、それが彼ら自身にかかわるからである。



公的なカネの賭けは、アメリカが 1991 年以來始めた外国との戦争の背後にある、アメリカ企業の賭けよりも大きいかもしれない。トランプの政策が約束した削減は、今アメリカ政府の財布のひもをコントロールしている、ほとんどすべての大きなロビー活動を脅かすものである。それは軍-産複合企業の、莫大な消費に基づくもので、これは一日につき 20 億ドルに達し、とどまることのない新兵器の開発と海外での戦争に使われるが、これは両方ともトランプの反対するものである。しかし大軍隊への何千億ドルという公的支出をカットするという話は、これで終わりにならない。それは、ほとんどすべての大口をあけた多国籍企業の、アメリカ国庫への吸い上げ、納税者のふところ、アメリカの労働者の大多数に、影響を与えることになる。ますます生活の賃金と社会保障を失い、むさ苦しい不安の中に放り出されていく、大多数のアメリカ市民は、政治体制と企業メディアが長く伏せてきた、そして今も沈黙し続けている問題に、注意を払うようになった。

トランプは、無力から生ずる大きな喪失を、体制の顔の前面へ突きつけた。これこそ彼がアメリカの政治的場面で伝染力をもつ理由である。彼は広く罵倒され、非難され、とめどもなく人身攻撃を受けているが、それへの反撃は、決して彼が目をつけていることに注目していない——すなわち、アメリカの企業の地球化によって、極端な金持が公的な金庫をますます収奪し、労働者の貧困化によって、ますます富裕化していくアメリカそのものの、長期的な貧困化の問題である。まず怒りが党派を超えて政治体制派を団結させたが、彼らは、なぜそうしたのか言えないでいる。どんなひどい嘲笑も名誉棄損も歯止めなしの状態だが、トランプの根底にあるこの政治ゲームの転覆は、舞台上では口にされないでいる。

ブルーカラーがよい仕事を失い、社会福祉も、公的インフラもすべてを失った、アメリカ人

全体の、選挙による不満の表明は、単に、階級の内部で解決してあげようという問題にすり替えられる。企業の地球化が、下層中流階級と民衆すべてを効果的に困窮させているのに、ワシントン体制の誰一人として、富が1%の者たちに集中することに反対の声をあげたことが全くないという事実は、否定することができない。

トランプに、彼が発しただけの悪態が返ってくるのは当然だ。しかし、このように理解するならば、真の問題を避ける標準的な光景である、エゴの争いの意味がよくわかる。個人的な攻撃は、トランプの選挙運動と体制派のそれが、隠された問題について、いかに深く分裂しているかの物語を語るものにすぎない。これこそ企業政治家とメディアが、外国のあの名指された“敵”に対して、戦争の太鼓を鳴らし続けるように、一方的に団結してトランプを悪魔化する理由である。

トランプは間違いなく恥知らずの日和見主義者である。しかし我々は、人身攻撃の輪の中でぐるぐる回り続けているだけで、この本の汚点としての、昔からあるプロパガンダというトリックの体制的悪の道德物語に降りていくことはない。トランプと政治的・経済的体制の間で、本当に賭けの対象となっている大きなカネの問題は、つながらないままで締め出されている。「誰がトランプをとめるか？」という問題は、アメリカ全土で問われているだけでなく、中国の世界メディアでも問われている。しかし最も議論されていないのは、彼が止める約束をしている、公衆の大量の血が流されて、国民が自らに奉仕する能力が衰え続けている事態である。この話題については、沈黙か口から飛ばす悪口の泡しかない。

## 大きな沈黙の点をつなぐ

最終的に人々は、なぜ体制が一致団結して、平生は分裂している両政党を超えて、トランプを嫌悪するのかを問うかもしれない。たとえ彼が、アメリカの特権と思い上がりのカリカチュアだったとしても、彼以外に誰が、腐敗した企業 - 国家やメディアの体制と、戦う者がいるだろうか？ 彼以外の誰が、すべてを奪われた大衆と、共和党の本来の内部からでさえ、一般の支持を受けることができるだろうか？ 彼以外の誰が、次のような問題を引き受けすることができるだろうか——戦争国家の超有利な企業利益、医薬品独占、健康保険問題、ロビーによる外交政策、オフショア税金回避、それに、何千万という本国の労働者から職を奪う、企業の利益のためだけのグローバル貿易など。その上で、大きな右翼の投票基盤をも引き付けておける者が、他にいるだろうか？

逆に、企業国家体制へのトランプの脅し以外の何が、アメリカの富と厚かましきの鏡のようなこの男への、敵意の一致を説明できるだろうか？ 他の何が、共通の非難の声以外に何も無い、党派を超えた、企業メディアによるヘイト・キャンペーンを動機づけることができる

だろうか？ トランプの立候補に本当に脅威を感じるのは、彼がひっくり返すことを約束する、深い組織的腐敗に寄りかかっている市民だけである。しかし、どうやって、これらの巨大な個人的な利益が、ますます多くの公共の富と支配を彼らの手に渡す、企業 - ロビー国家とうまくやっていくのだろうか？ そこでは、アメリカ人の大多数と、彼らの共通の利益が犠牲になっていて、ほとんどの人々が、すでに彼らを憎み、彼らに組織的に搾取されているというのに——。彼らがそこをうまく切り抜けるのは、誰も、それに口を出す者がいないからである。

トランプは、こうした大食いをする、公共の莫大な利益に対する脅迫の代弁者となっていて、それはあのスーパー・クリーンで、情報の豊富だった、ラルフ・ネイダー大統領候補もできなかったことだ。企業メディアと政党機械が、選挙の場ではひたすら彼を抑えつけたので、彼が大統領候補だったことさえ知る人は少ない。トランプに対して、それはできない。これは普通ならシームレスな、政治とメディアの体制にとって、大きな異端の問題である。なぜなら彼らは、この企業国家ゲームから、多額の手当を全員がもらっているからだ。トランプの全体的な戦略は、大衆の注意を引き付けることをベースにしている、彼はその達人であり、買収されることのない金持ちであり、アメリカ全土と世界で、最も注目されているアメリカ人である。彼を黙らせることはできない。歯止めのない個人的中傷と攻撃が、彼の政策にさるぐつわを噛ませ、彼に対して逆風を起こさせる唯一の方法である。



最後にはそれは功を奏するかもしれない。それは、一般大衆がそのために払う破局的な犠牲がどれほど大きかったとしても、いかに、災難と破産をもたらす外国侵略と戦争が、上手に売り込まれてきたかということである。

## ウィスコンシンまで

点と点をつなぎ、トランプが、貪欲な企業の大口がワシントンの何兆ドルという公的予算を食うことに対する、政策的な暴動をも説いて聞かせたことを考えると、その意味が明らかになってくる。しかし、そのつながった意味はかき消される。それに代わって企業メディアと政治家が、ファシズム、人種差別、セックス主義と境を接するような、エゴマニア的な宣伝を仕掛けてくる。しかし彼が押し進める禁断の政策は、ワニの穴に飛び込むことにより似ている。彼は、ペンタゴンの予算を 50%カットすると言ったと記録されている。いかなる勝利した政治家といえども、軍 - 産共同企業にあえて手をつけた者はいない。アイゼンハワー

がいるけれども、彼はただ、退任スピーチでそれを挙げて警告しただけである。トランプもまた、アメリカは、イスラエル - パレスチナ紛争については「中立で、正直な調停者でなければならない」と言っている——アメリカの政治において、これがどれほど口にできないことだろうか！ 製薬業界もまた名指しをされて、「政府の価格交渉によって、4000億ドルの節約をすべきだ」と彼は言っている。それよりもっと強力な「健康維持機構」(HMO)については、“単独支払者システム”という責任体制にすべきだと言っている——これはアメリカという企業福祉国家では、生きた悪魔のようなものだ。

トランプは、「試しに、ロシアや中国と付き合ってみるのもいいのではないか？」と言って、アメリカのイデオロギーの“敵”の中心に近づく挑戦をしている。彼は大きくしてファシストではない。彼はまた、2008年後は、ウォール街銀行の国有化を受け入れる態度をとっている。こうしたことは何一つとして、日の目を見ることはない——右翼・左翼の分断を超えてさえ効果的に行われている、トランプ憎しの文化の中では——。中でも特に、トランプは、名前の間違った“自由貿易”というグローバル・システム全体を、拒絶している——なぜならそれは、より安い労賃を求めてどこへでもいく権利を企業に認め、関税なしでアメリカに逆輸入することによって、「アメリカの労働者の生活を空洞化する」ものだからである。しかしこれもやはり、そのつながった意味を口にするのは抑圧されている。トランプはそれと同時に、アメリカを海外の戦争から引き揚げさせようと考えている。これこそ企業の地球化のもう一つの大きな柱で、多国籍企業国家にとって真の危険となることに、彼は手を出そうとしているのである。

こうした政策のすべてが脅威となるのは、アメリカの支配的マネー企業だけであり、アメリカは、このスーパー・パワーの公的財布に依存して、多国籍独占事業を拡張し、彼らの富を増やしているのである。これが本当の体制の利益で、それはこれまで大衆の監視の目を逃れてきたが、今、バーニー・サンダースの批判と共に、1960年代以来、このアメリカのシステムへのどんな政治的挑戦よりも大きい、ドナルド・トランプ現象の批判をかわしている。トランプは確かに労働者階級のヒーローではない。彼は純粋な資本主義者で、資本主義を代表するような、私的利益と貪欲さのすべてをもっている。しかしこの場合には、彼は、最大の年収を公的な財布から奪って金持ちになった資本主義者でもなく、労賃や税金を、人間的に劣る外国の権力に渡すことによって金持ちになったのでもない。トランプは、寄生する資本主義がアメリカそのものの生命力を食い滅ぼしていくという、昔からわかっていた認識を、新しく目覚めさせたのである。

(ジョン・マッカートリー教授は *The Cancer Stage of Capitalism: From Crisis to Cure* (Pluto) の著者)

